

研究主題「特別支援教室における個別最適な小集団指導の実現

ー児童・生徒一人一人の課題に即した指導を実現するシートの開発を 通してー」

東京都教職員研修センター企画部企画課
文京区立本郷小学校 主任教諭 小川 亮

第1 研究のねらい

「特別支援教室の入退室等検討委員会」の報告では、退室を見据えた指導目標の立て方に課題があるとしている。退室をするためには、適正な指導目標を設定した上で、その達成に向けた指導をすることが欠くことができない。

本研究は、特別支援教室の小集団指導が包含する2点の課題の解決を目指す。

第一に、児童・生徒に一律に指導をしていることである。「学習指導要領解説自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）」（平成30年3月）に、「自立活動の指導計画は個別に作成されることが基本であり、最初から集団で指導することを前提とするものではない」とあり、個別指導と比較すると、小集団指導を実施する指導様式や指導方法、指導事例が少ない現状がある。そのため、指導内容が、児童・生徒一人一人の指導目標に合致していないケースがある。東京都公立学校情緒教育研究会の調査（令和3年12月）によると特別支援教室に在籍する8割の児童が、小集団指導を受けているとある。個々の児童・生徒の指導目標に即した小集団指導の実現が求められている。

第二に、個々の児童・生徒の指導目標に即した継続的な小集団指導が実施されず、児童・生徒の学びが積み上がらないことである。毎時間、異なる学習内容を指導したり、単元間の接続がなかったりする現状がある。学習指導要領解説自立活動編には、「長期的な観点に立った指導目標（ねらい）を達成するためには、個々の幼児児童生徒の実態に即して必要な指導内容を段階的、系統的に取り上げることが大切」と示されている。小集団指導についても同様に、指導目標の達成に向けて年間を通じて段階的、系統的に指導できるようにする必要がある。

本研究では「特別支援学級・通級による指導 教育課程編成の手引」（令和3年3月）（東京都教育委員会）に示された障害種別に対応した自立活動6区分27項目に基づき、「小集団指導計画シート」を開発した。これは「障害種」と「課題」を入力すると「自立活動の区分」と「3段階の短期の指導目標」を設定できる簡易なフォーマットである。これにより小集団を構成する個々の児童の指導目標を記載した1単元の小集団指導計画を生成し、指導の個別化を実現するとともに、単元間を接続し、段階的・継続的な指導ができるようになる。

第2 研究仮説

児童・生徒の課題を自立活動の6区分27項目から捉え直した指導目標を設定し、段階的・継続的な指導計画を作成し指導を行うことで、一人一人の指導目標に即した小集団指導ができるだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

- (1) 特別支援教室の目標を達成して退室する児童・生徒の割合は、おおむね0%から20%で、区市町村によって大きな差があることが分かった。退室を見据えた指導目標の立て方及び

指導目標に対する評価の考え方が難しいことなどが課題である。

- (2) 特別支援教室で指導を受ける児童・生徒数の増加等に伴い、必要な教員数も増加し、特別支援教育に関する専門性の急速な向上が求められていることが分かった。そのため、特別支援教室の目的を踏まえた指導の質の確保・向上が課題となっている。
- (3) 指導目標を設定し、それらを達成するために指導内容を段階的に取り上げることや自立活動の学習状況等を踏まえた継続的な指導が必要だと分かった。また、小集団指導においては、学習指導要領には、具体的な手続き方法や書式が示されていないことが分かった。

2 調査研究（令和4年7月実施）

文京区立小・中学校の特別支援教室拠点校8校教員50名、台東区立小・中学校の特別支援教室拠点校5校教員30名を対象に質問紙による意識調査を行った。「指導の困難さ」は個別指導は20.64%、小集団指導は25.01%、「指導目標の設定の困難さ」は個別指導は22.54%、小集団指導は25.00%、「段階的・継続的な指導の困難さ」は個別指導は18.74%、小集団指導は25.02%という結果だった。教員は小集団指導の実施や指導目標の設定、段階的・継続的な指導に関して、個別指導と比較して困難な意識があることが分かった。

表1 指導形態別のt検定の結果
 指導別の平均値のSD及びt検定の結果

	個別指導		小集団指導		t
	M	SD	M	SD	
指導目標	22.5	10.5	25	4.9	-0.68*
段階的・継続的	18.7	7.94	25	9.4	-6.3**

*p>.01, **p>.001

- ・ t検定の結果、指導目標の設定や指導目標に即した指導に関して、小集団指導に関する教員の困難な意識は、個別指導より優位に高かった。(t(4)=.68, p=.004)
- ・ t検定の結果、段階的・継続的な指導に関して、小集団指導に関する困難な意識は、個別指導より優位に高かった。(t(4)=6.3, p=.003)

3 開発研究

(1) 自立活動指導目標例集

障害種と課題を自立活動6区分27項目から捉え直し、3段階の指導目標例を示すことを想定し、東京都教育委員会の「特別支援学級・通級による指導 教育課程編成の手引き（令和3年3月）及び「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編」を軸に、「特別支援教室の運営ガイドライン」に示された指導目標の設定方法を参考に作成した。

自立活動指導目標例集（抜粋）

自閉症

1 健康の保持

(1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること。

◎内容 特定の食物へのこだわりを軽減したり対応の仕方を身に付けさせたりする指導

○課題 特定の食物などへのこだわり

・指導目標例

- ①個別指導で、食べられる物と食べられない物を整理し、自分の偏食の傾向を理解した上で、好きな理由や嫌いな理由を言葉で伝えることができる。
- ②個別指導で、食べられない物がある際に、量を減らすことを依頼したり、苦手な食べ物を少しずつ食べようとしたり、対応の仕方を理解することができる。
- ③学級で、食べられない物がある際に、理由と対策を考え自身で対応策を伝えるとともに、食べられない物にも挑戦しようとする事ができる。

(2) 小集団指導計画シート

児童・生徒一人一人に応じた段階的・継続的な小集団指導を実現する「小集団指導計画シ

ート」の開発を行った。個々の児童・生徒の指導目標に即した小集団指導を実現し、評価を行うことで、学びの定着を図る。

4 検証授業(令和4年10月～11月実施)

自立活動小集団指導で、児童6名を対象に、検証授業を実施した。

表2 単元計画

	第1時	第2時	第3時	第4時
1時間の学習の流れ及び評価機会	1 挨拶をする。			
	2 学習の進め方を知り、学習の見通しをもつ。			
	3 本時の目標を確認する。			
	4 「仲間カード」をする。	4 「仲間カード」をする。	4 「仲間カード」をする。	4 「仲間カード」をする。
	①ルールを聞いて理解する。(A、B、C) ②同意概念を知る。(具体的内容)(D、E、F) ③勝敗が付いたときの気持ちを考える。(C) ④活動(同意概念を理解して、カードを集める。)(A) ⑤指導目標の振り返り(教師による伝達)(全員)	①ルールを聞いて理解する。(A、B、C) ②同意概念を考える。(具体的内容)(D、E、F) ③勝敗が付いた際の適切な態度を知る。(C、F) ④活動(同意概念のカードを集めながら、周囲の状況を理解する。) ⑤指導目標の振り返り(他児童による伝達)(全員)	①ルールを聞いて理解する。(A、B、C) ②同意概念を考える。(具体的及び抽象的内容)(D、E、F) ③勝敗が付いたときの適切な態度を考える。 ④活動(勝敗を意識しながら、カードを集める。) ⑤指導目標の振り返り(自己評価)(全員)	①ルールを聞いて理解する。(A、B、C) ②同意概念を考える。(抽象的内容)(D、E、F) ③勝敗が付いた際の適切な態度を考える。(C) ④活動(勝敗が付いた際に適切な態度をとり、活動に参加する。) ⑤指導目標の振り返り(自己評価)(全員)
	5 「おじぞうさんがころんだ」をする。	5 「おじぞうさんがころんだ」をする。	5 「おじぞうさんがころんだ」をする。	5 「おじぞうさんがころんだ」をする。
	①説明を聞き活動を理解する。(A、B、C) ②発言を聞き1種の動作をする。(A、B、C) ③活動を振り返る。 ④②と同じ。 ⑤意見を伝える。(D、E、F)	①説明を聞き活動を理解する。(A、B、C) ②発言を聞き2種の動作をする。(A、B、C) ③活動を振り返る。 ④②と同じ。 ⑤相手の意見を聞いて、伝える。(D、E、F)	①説明を聞き活動を理解する。(A、B、C) ②発言を聞き3種の動作をする。(A、B、C) ③活動を振り返る。 ④②と同じ。 ⑤話し合いをして活動する。(D、E、F)	①説明を聞き活動を理解する。(A、B、C) ②発言を聞き4種の動作をする。(A、B、C) ③活動を振り返る。 ④②と同じ。 ⑤協力する。(全員)
	6 本時を振り返り発表する。			
	7 自分の指導目標に即した自己評価を、シートに記入する。(全員)			

(1) プロトコル分析(量的分析)

授業の動画から、児童の「発言」、「行動」、「教師からの対応」、「指導目標への取組」を文字に起こし、G(「good(良い)」)とI(「improvement(改善)」)に分類した。小集団指導計画生成シートを活用し、個々の児童が目標に向けた段階的・継続的な指導をすることでgoodの割合が増加しimprovementの割合が減少した。

表3 プロトコル分析結果

児童A		児童B		児童C		児童D	
第1時	第4時	第1時	第4時	第1時	第4時	第1時	第4時
goodの割合							
22%	33%	29%	67%	57%	86%	69%	94%
improvementの割合							
78%	68%	71%	33%	40%	14%	31%	6%

(2) 達成段階評価(量的分析)

授業後に教員全員で、全ての児童に数値で評価をした。評価規準について、3は「一人でできている(仲間に教えることができる)」、2は「ほぼ一人でできている(一部、教員や周囲の人の支援が必要)」、1は「できていない(常に教員や周囲の支援が必要)」とした。平均して全ての児童の数値が向上しており、指導目標に即して児童の変容が見られたと教員が判断したと考えられる。

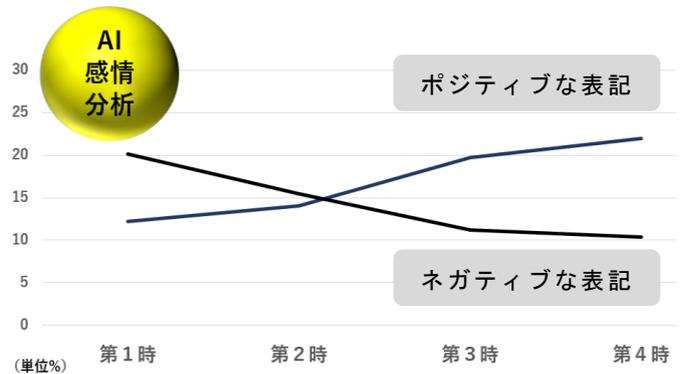
表 4 達成段階評価

	第 1 時	第 4 時	第 1 時	第 4 時	第 1 時	第 4 時	第 1 時	第 4 時
	児童 A		児童 B		児童 C		児童 D	
教員 1	1	2	1	2	1	2	2	2
教員 2	1	1	1	2	2	2	2	3
教員 3	1	2	1	2	1	2	2	3
教員 4	1	2	1	2	1	2	2	2
教員 5	1	2	1	2	1	2	2	2

(3) AI 感情分析 (量的分析)

表 5 AI 感情分析

保護者に向けて記載した連絡帳の教員の文章をテキストマイニングで分析をした。「小集団指導計画生成シート」を用いて、第 1 時から第 4 時に向けて難度や負荷を上げた段階的な指導をするとともに、指導目標に即した継続的な指導をした。その結果、連絡帳の記載内容についてポジティブの割合が増加し、ネガティブな割合が減少した。



(4) 児童の自己評価の記述分析 (質的分析)

授業前に指導目標を確認し、授業後に指導目標に即した自己評価を行った。第 1 時は、自分の課題を踏まえ、自分の目標を捉えた内容になっている。第 2 時は、自分の目標に即した評価をした内容であり、第 3 時は、目標に対して「できたこと」と「できなかったこと」を整理した内容になっている。第 4 時は、第 3 時にできなかったことができるようになったという内容になっている。指導目標に即した指導をした結果、児童の記述に変容が見られた。

表 6 児童の自己評価記述の分析

第 1 時	第 4 時	第 1 時	第 4 時
児童 A		児童 B 指導目標	
おちついて、できたと思う。	ルールどおり、すぐにうごくことができた。	むかしのあそびをおもいだせた。とてもできた。	目標のとおりなかまといっしょにがんばってきずなをふかめた。
児童 C		児童 D	
ぼくは、いつもより先生の目を見て話がきけた。	自分はすぐルールをいしきして守ることができてうれしかった。	自分の考えは、伝えられたと思う。	みんなの意見を聞きながら、自分の考えを伝えられた。

第 4 研究の成果

- 「小集団指導計画シート」を用いることで、個々の児童の指導目標に即した「個別最適な小集団指導」ができた。また、段階的・継続的な指導をすることで、「プロトコル分析」及び「達成段階評価」の内容から、児童の変容が確認できた。
- 「自立活動指導目標例集」を用いて障害種と課題から個々の児童の指導目標を設定した。「AI 感情分析」の結果及び「児童の自己評価記述」の変容から、指導目標例が、児童の課題に対応した妥当なものであることが確認できた。

第 5 今後の課題

- 本研究の開発物を様々な場面で活用して、汎用性を高める。
- 設定した指導目標に対する適切な評価ができる方法を開発する。